僕と彼女の召喚士生活

茜空　裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と彼女の召喚士生活

【Ｎコード】
Ｎ４９０５Ｚ

【作者名】
茜空　裕

【あらすじ】
大地震により、世界が危機に陥っていたとき。
一介の高校生である一瀬辰也は奇怪な事件に巻き込まれる。
それは、現実世界とは別の次元から召獣と呼ばれる生き物が召喚されるというものだった。
辰也は契約と呼ばれる儀式を行ってしまい、その召獣の召喚士【サマナー】となってしまう。
そして召喚を嗅ぎつけた一人の少女――幼馴染であり、召喚士の一人の五月女ミズキが辰也の前に現れる――――。

彼女に連れられ色々な召喚士と出会い、学び、鍛え、戦い、強くなっていく辰也。

召獣を悪用しようとする謎の組織、それに歯向かう辰也達
そして化石燃料をめぐる、そして世界の実権をめぐる世界大戦。
一匹の召獣と一人の人間が送る日々と戦いをここに書き記す。

※タイトル『僕と彼女の召喚士生活』は『ボクとカノジョのサマナーライフ』と呼びますのであしからず。

プロローグ

２０２０年。

世界各地を巨大な地震が襲った。

なんの前触れもなく起きた自然災害に人々は成す術もなく、ただただ世界が壊れるのを見ていた。

被害額は日本円にして約三百兆円超。

死傷者数は少なくとも二千万人を超える。

しかし被害額死傷者数もさることながら、最大の問題は別にあった。

それまで世界を支えていた化石燃料の大半を失ったのだ。

天然ガスに至っては確認されていたもののほとんどが失われた。

化石燃料の資源問題は数十年前から課題の一つとされていたが、その問題が２０２０年になって解決したか否かと聞かれれば、否だ。

そして、化石燃料の不足によって一番に問題とされたのは電力だ。

日本では地熱、太陽光発電をメインとし、発電所の数を徐々に増やしていったのだが、それでも火力発電分の電力を補うほどには到底及ばなかった。

そしてそれは他国も同様。

元から火力発電に頼らず、水力、風力発電を行っていた国も多数あったのだが、それらも地震からは逃れなかった。

大破した発電所を修理するにしても、町の復旧や国民の救助、手当てでわずかしか残らない予算ではただの気休みにしかならない。

そのため、世界では簡潔に多量の電力を作ることが必要とされている。

それに当てはまるのは火力発電ぐらいだろう。

そこで問題となったのが、先程の化石燃料問題だ。

初めは化石燃料の分割について各国の首脳達が話し合っていたのだが、すでにまともに残っていない資源を分割しても無意味であることは明白だった。

やがて痺れを切らした某国の首脳がついに強気に出てしまい、『我が国が全ての資源を使わせてもらう』と言いだした。

その国の言い分は『我が国なら少ない資源を有意義に使うことができる』らしい。

勿論、そんなめちゃくちゃな意見が通る筈がなかった。

それどころか、その発言に隠していた思いが後押しされたのか、『いや、我が国こそが』『我が国じゃなきゃ駄目だ』と別国の首脳までもが資源は自分達のものだと主張し始め、最終的には激しい口論が繰り広げられたという。

それからと言うもの、国と国の間に険悪な空気が流れ、貿易にヒビが入り始めたらしい。

そして。

『大陸連動大震災』と呼ばれる大地震から一年が経った。

国同士の険悪な関係は未だ続いている。

武力を用いた交渉はまだ行われていないが、それも時間の問題でしかない。

いつ戦争が起きてもおかしくない、そんな恐怖が世界全土を包んでいた。

そんな中。

日本の東京都に住まう一介の高校生、『一瀬辰也（いちのせたつや）』は、奇怪な事件に巻き込まれていた。

０１　全ての始まり

「おう、兄ちゃん。少し金貸してくんね？」

夕方、学校の帰り道。

一瀬辰也はスキンヘッドの男性に話しかけられた。

辰也は白けた目で男性を見た。

２０２０年になって治安がよくなったかと言うと、実際はそんなことはない。

むしろ場所によっては悪くなっているところさえある。

その原因には警察が挙げられる。

別に警察が無能になったわけではない。

むしろその逆だ。

いつ起こるか分からない戦争に向け、政府は警察を正式な軍隊として厳しい訓練を行っている。

だが、そんな厳しい訓練を行っているのならば警察としてちゃんと機能しているのか。

答えは、ノー。

数年前に比べ、警察は行政警察活動などをまともに行えていない。

とはいえ、全く警察活動を行えていないのでは面目が立たないので、警察内部で『治安維持科』『騒乱鎮圧科』『軍兵科』と三つに分けられている。

しかし、完璧とは言えない警察をさらに三つに分けてはその分効率も落ちてしまう。

警察がまともに機能しているのは金持ちや政治家の住まう都心ぐらいで、辰也の住む都外では小さな交番に数人の警察がいるだけでパトロールもほとんどできていない。

それは不良なヤクザにとってはこの上なく嬉しいこと。

その被害は、今の通りだ。

「・・・どいてくれませんか？邪魔なんですけど」

辰也は道を塞ぐ恐らく不良であろう男性に向かって冷めた声で言う。

不良が怖いと言うことはないが、こんな奴に使う時間がもったいないと思っていた。

しかし男性は目元を引きつかせながら人の悪い笑みを浮かべ、自分には害はないよと見え見えの演技をする。

「そんな連れないこと言うなよォ。ほんのちょっとでいいからさ、なっ？そうだ、あっち行こうぜ。面白いもんがあるんだよ」

そう言いながら男性は店と店の間にある路地裏を指差した。

そこに連れて行き金をたかろうとしているのは見え見えだった。

辰也は男性を無視して帰ろうとした。

だが男性は辰也の腕を強引に掴み、自分の目の前まで引きよせて言う。

「ちょっと待てや。テメェ、なに俺のこと無視してんだよ？ん？ちょっとだって言ってんだから大人しく付いてきてくンねェかなァ？」

「・・・ッ」

男性は辰也の腕を掴む手に力を入れる。

爪が食いこむ痛みが辰也の腕を貫く。

男性は辰也を引っ張り、強引に路地裏に連れていく。

ここで大声をあげて助けを求めるのもよかったが、あまり意味がないことも分かっていた。

今まで何度か不良に目をつけられたが、こんなにしつこいクズは始めてだ。

辰也はもがくこともせず、なにも言わず男性を睨みつけていた。

路地裏を少し進んだところに、二人の男女がいた。

剃りこみの入った金髪の男性と、大きなピアスと派手なメイクが目立つ茶髪の女性。

十中八九、辰也を連れてきた男性の仲間だろう。

「遅いぞ。遊んでたんじゃないだろうな？」

金髪の男性がスキンヘッドに話しかけた。

多分、彼がこのグループのリーダー格なのだろう。

「そんなことしねェよ。この兄ちゃんが強情でよォ」

「なァにぃ？そんなガキが金持ってンのォ？」

今度は金髪の女性がスキンヘッドに言い、辰也のことをじろじろと眺める。

辰也からすれば、至近距離でじろじろと見られるのは不快そのものだ。

「それじゃあガキ。有り金全部寄越してくれねェか？痛い目にゃ遭いたくねェだろ？」

「・・・持ってませんけど」

「だーかーらー。大人しく出しちゃえば痛い目に遭わなくて済むんだよォ？」

「持ってないものは持ってません。僕は手品師じゃありませんからないものを出したりもできませんよ」

「・・・舐めてンのかテメェ！！」

流石に挑発をし過ぎたのか、スキンヘッドが急にキレて辰也を殴り飛ばした。

いきなり殴られたので防御も受け身も取れるはずがなく、辰也は地面に倒れた。

土の味と鉄の味が口に広がる。

殴られたことよりも、服が汚れたことの方が頭に来た。
スキンヘッドは追い打ちをかけ、辰也のふくらはぎ辺りを思い切り踏みつけた。
絶叫は路地裏に木霊する。
今度は服が汚れたことより、踏みつけられたことの方が頭に来た。
しかし、だからと言って反撃ができるわけではない。
スキンヘッドの追撃は続く。
体中に鈍い痛みが広がる。
金髪の男性と女性は辰也を見てへらへらと笑っている。
金を巻き上げるのが目的ではなく、誰かを痛めつけるのが目的だったと言いたげに。
辰也はただただ耐えた。
「・・・けっ、もう飽きちまったよ。このガキどうすんよ？そこら辺に転がしとくか？」
「ああ。路地裏の入り口近くに転がしとけば誰かが勝手に拾うだろ」

それじゃあ気絶させとっか、とスキンヘッドが言い、止めに辰也の腹を蹴ろうと足を振り上げた。

そのときだった。

カァァァアアアアン！！と。

工事の音や、ただの生活音とは違う大きな音が響いた。

カァァァァァアアアアアアアアアアンン！！

音は時間が経つにつれて大きくなっていく。

それはもう、その音以外なにも聞こえないほどに。

気が付けば三人の不良はすでに消えていた。

謎の音に恐れをなして逃げ出したのだろう。

自分を置いて逃げ出すとは卑怯で卑劣だと辰也は思ったが、それどころではなかった。

早く逃げなければ。

ここにいてはなにかに巻き込まれる。

「早く・・・早く逃げないと・・・痛ッ」

体が、痛みでまともに動かない。

ふくらはぎを踏みつけられた痛みで、立つこともままならない。

この音の発生源は明らかにこの路地裏、正確には辰也のすぐ目の前だ。

逃げなければ絶対にマズイ、しかし痛みで動くことができない。

このままでは、ヤバい・・・ッ！！

そして、なにかが始まった。

地面一面が真っ白になり、次に真っ白な光が視界を覆う。

同時に、音が消えた。

なにも見えない。

なのに、先程までの恐怖はなくなっていた。

柔らかい光。

シュゥゥゥゥ・・・。

なにかが融けるような音が聞こえ、真っ白な視界も徐々に元に戻った。

しかし、それは全てが元に戻ったという訳ではなかった。

「フゥゥゥン・・・」

声が聞こえた。

それは犬や猫の鳴き声ではなく、ましてや人間の声でもなかった。

なにかが、すぐそこにいる。

それも辰也の知っている一般的な動物ではない、なにかが。

視界が戻ったとはいえ、すぐになんでも見えるようになることはない。

歪んでぼやけた視界では、目の前に白いなにかがあることしか辰也には分からなかった。

それが息をしていることもスースーという音で分かる。

まだちゃんと見えないうちに逃げ出したかったが、やはり体が動かない。

ぼやけた視界も徐々に焦点が合い、周りもしっかりと見えてきた。

そして、見た。

そこにいた謎の生き物を――――。

「フゥゥゥン・・・」

――――ドラゴンを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4905z/

僕と彼女の召喚士生活

2011年12月24日11時52分発行